

今年のブックステップ事業では小学1、4年生と中学2年生に本が贈られた。みんなお気に入りの本を抱えてにっこり。

バス 三じ十五分
クラブ 三じ五分

「想像力」が 「創造力」を はぐくむんだ



読書の魅力

想像する世界から 創造する世界へ



本年度の読書感想文・画コンクールの審査会は1月15日、山村開発センターで実施された。各部門別に分かれた審査員たちは、作品の表現力や読解力、独自性などについて厳正に審査した。

入賞した作品に限らず、どの作品も、新しい世界と出会えた喜びにあふれ、現実世界では味わえない驚きに心を躍らせていた。読書感想文・画とは決して「感想」だけを表現するものではない。次の文を読んでみて欲しい。山本悠矢くんの感想文「ホームランを打ったことのない君を読んで」から。

「ぼくはまだホームランは打ったことがないけれど、初めてヒットを打った時のことはしっかりと覚えてます。とても気持ちよくてうれしくて『もっと打ちたい』という気持ちになりました。きつとホームランを打ったら、もっと気持ち良くなれるんだらうなと思います。ぼくもいつか場外ホームランを打ってみたいです。そのためにもこれからの練習をがんばらうと心に決めました」。

練習に打ち込む悠矢くんの姿がそこに見えるかのような文面に、思わず心が温かくなる。「野球が大好き」という素直な気持ちがじかに伝わってくるようだ。

主人公と自分自身との境遇を照らし合わせ、この本に心を動かされ、勇気をもらい、

夢を描き、それに向けて努力する悠矢くんの姿が生き生きと書かれている。本の世界に思いを馳せながら、自らの明日を創造している。読書が読者の「心の成長」を促している好例と言えるだろう。

よい本との出会いは よき友との出会いにも似て

本を開けば、外国へも宇宙へも旅立てる。ときには言葉を話す昆虫の世界にだって飛び込んでいける。

「このページの先には、何が待っているんだろう」。そんな想像はいくらでも、それを無限に広がっていく。

視覚や聴覚に頼らず、脳の中で心の中で、世界を描き、人物像を描く。この「想像力」こそがテレビやインターネットでは真似のできない「読書の魅力」ではないだろうか。情報を得るだけなら、デジタルメディアには到底かなわない。テレビ番組を見たり、携帯を使ったり、パソコンで検索する方が簡単だし便利なのは確かだ。だが本は、情報を得るためだけに存在するわけではない。想像することで無限に広がる世界。演劇も、感想文も、絵を描くことだって、すべて創造力をはぐくむことにつながっている。

ある人に聞いた言葉が印象に残っている。「わたしにとっての本は、知識を与えてくれるものであり、新しい世界を広げてくれるものであり、心温まる親しい友人のようなものである」。

ページの向こうに、たくさんの友達が続いている。さあ、本の世界に踏み込もう。すてきな友達に会いにいこう。